

ダークな遊び

木坂 広一

編集長の佐々木明彦は大物視されていて、社長の秘蔵っ子だった。社員達からも別格扱いにされていて、雄太にとっても頭の上がない存在である。

聞くところによると、都内の有名な進学校から外語大学のフランス語科に現役で入ったとかで、本人もずば抜けて頭がいいと思いついでいる。どんな人物か、月日を経るごとに実体が分ってきた。彼は聞きもしないのに、

「自分は頭が良すぎて、何もできない」

などと吹聴するのだった。また「俺は気違いと言われている」と得意げである。卑下しているのではなく自慢しているのだ。つまり、天才と狂人は紙一重と言いたいらしく、時代遅れの都市伝説を今時口にするのも珍しい。雄太にもわざわざ、俺、気違いだよなあ、と同意を求めたりするので返事に困った。

「いや、普通ですよ。まったく普通です。心配はいりません」

雄太は答えるしかなかった。女遊びも得意の分野ら

しく、中でもSMやアヌスを好んでいる。不可解なのは宇宙人と会って話をしたという体験だ。こんなガセネタを口にするのは信じがたいが、しかし真剣である。気に入らないのは、私用を言いつけられることで、大抵は断わるのだが、一つだけ例外があった。それは佐々木の住まいに用事で行かされることだ。高田馬場で細君に古本屋をやらせていて、たまに本を届けに行くことがあった。細君は雄太の好みだった。テレビにも出演してよく見かける女性ライターに似ていて、見るからに男を尻に敷くような性格をしている。むろん顔立ちもよくて、雄太は引かれるものを感じていた。もっと親しくなろうと思つて、佐々木に指示されるのを楽しみにしているが、そうそう頼まれはしなかった。

勤め先のS書房は信濃町にあり、駅から徒歩で五分くらいのところで、途中新興宗教の本部の前を通つて行く。いつだったか、白人の外国人が列を成していて、幼稚園児のように手をつないで歩いているのでゲツとまった。信濃町は穏和でシットリした街なので好きだ

が、宗教は別だった。雄太は宗教や神のたぐいは大嫌いで、性格の弱い母が何やら信じていて、神棚を祭っており、ある時、強要されて腹を立て、神棚を玄關の土間に叩き付けて足で踏みつけ、唾を吐きかけてやった。おふくろが怒り、雄太は謝って許してもらった。が、親父には、台風の後の水たまりに突き落とされた。近所の老女が来て急いで拭き取ってくれた。婆さんの親切は嬉しかった。

会社は四階建ての自社ビルで、オフィスは二階にあり、漫画雑誌を三冊発行している。肩の凝らない仕事だから気楽にできるだろうと思つて入った。彼らは大方小説家や詩人、歌人、写真家など志してしており、中にはプロ級もいるが、すでに脱落している者もいた。雄太は小説家志望だが、同僚には黙っていた。だから甘く見られていた。

「塚原さんは、文学は分るが、小説を書いていないから、楽な相手だ」

などと蔑視しているへぼ野郎がいる。雄太はこんな連中と競う気はなかった。彼らはでかいことを口にするが、真の表現者などではない。将来は大方がもつと惨めな穴の中に埋没しそうな連中ばかりで、二十六の雄太も成功するかどうなるかわかりやしないが。もつ

とも例外はいる。社に出入りしているフリーライターの峰杉隆一郎である。雄太が就職に困っている時、長崎出身の父が、同県人の峰杉を通して友人の佐々木に話してくれたから入社できた。だから雄太は佐々木や峰杉には感謝している。特に峰杉が一日も早く賞をとって、作家として活躍してくれることを願ってやまない。雄太はその後を追いかけるつもりでいた。

だが、そんなことは誰にも話すようなことはなかった。だから同僚からは何を考えているのか、分らない奴だと見られていた。特に上司の佐々木は一段と見下げているのが許せなかった。そうかといつて佐々木は表現者に向いているとは思えない。

「あんたなんか文学が分るか」

ひそかに軽んじている。雄太はこの点に関しては自信を持っていて優位に立っているつもりだ。そして道化を演じたりして、煙幕を張っていたりする。正体不明の雄太だが、とつくに市民的な凡庸な良識から決別しているつもりでいる。ただ、今はボルノチックな編集者に甘んじていて仕事は最低だが、最低こそ身の置き所だと自負している。

女の事務員は二人いるが、そのうちの一人はまさに最低そのものだった。全身から差別のオーラを漂わせ

ていて、異様な感じさえ与えた。社員になって二年ほどした頃、騒動が持ち上がった。その差別女が広告課の宮内を怒らせてしまったのだ。宮内は普段は温厚な性格で、万葉集や源氏物語を愛読している古典派なのだが、その時ほど激しく怒ったことはない。日頃からその女への憤懣が溜まっていたのだろう、まるで突然火山が噴火したかのようなのだ。外出先から戻るといきなり怒り出し、彼女の肩のあたりを小突いて、「お前の電話の掛け方は、なっていないぞ」大声を立てた。「お前は営業課に何年勤めているんだ。今ここで電話の練習をしてみろ」

「誰がやるものか」

「こう言え！いつもお世話になってます、とね。それだけでいい、言うんだ」

「あんたに言われる筋合いはないわ」

「俺の言うことを聞け。二十回繰り返し返せ」

「…」

差別女は呆然としている。

「早くやるんだ、笑顔を浮かべながらやれ！ やらないとおめえの×××にビール瓶を三本突っ込むぞ」

女はふて腐れて宮内を睨みつけた。「セクハラは止めてよ」

「ぐだぐだ言わないで、さっさとやるんだ」

そこへ営業部長が来て、仲裁に入った。

「まあまあ、落ち着きな」

普段は乱暴な口の聞き方をする男だが、何故かその時は宮内に優しくかった。部長は彼を廊下に連れ出して何やら話している。後から聞いた話では、部長もあの女を嫌っていて、これほど変な女はどこにもいないと言ったらしい。君の気持ちは分る、今は抑えてくれと小声で諭した。宮内は感じ入ったのか穏やかになった。

「興奮してすみません」

「社長には俺から話しておくから、気にするな」

雄太はその光景を見ていて、宮内や部長の振る舞いにいたく感激した。他の社員も同様だった。男の社員達は普段から誰一人として、その性格ブスを評価していなかった。こんな低レベルの女は軽蔑以外の何物でもないのだ。

夏が終わり、これから徐々に涼しくなる頃である。

土曜日の午後、自宅でパソコンを打っていたら、開け放った窓からスズメが入って来て、天井を飛び回っている。一向に出て行かないので、長い棒を持って来て追い出そうとしたら、本棚と壁の間に入り込んでしまった。六畳一間の壁の一面には七段の本棚が隙間なく

並んでいる。躍起になって突いたのだが、羽音を立てるだけだった。そのうち音も立てなくなり、死んだかもしれない、イヤな気分になった。もしそうだったら死骸を取り出すのに大変な作業になるからだ。どうにもならなくて気が滅入り、夜になると寝るしかなかった。

翌朝、早めに目を覚まして横になっていたら、足元でガサガサとビニールの音がした。ハツとして耳をすましたら、いきなり小鳥が飛び立ち、開いていた明るい窓から逃げて行った。かれはじっとしてチャンスを伺っていたのだ。雄太は大満足し、身を守るための本能に感心した。

取材で遅く社に戻ると竹山恒夫が一人だけ残っていた。自販で缶コーヒーを買って来て、彼にも勧めると、少し話さないかと雄太を自分の近くの椅子に座るように言った。竹山とは班が違うから話す機会がないのだが、気が合う間柄だった。竹山は小説を書いていて、同人雑誌に発表している。特にストリップに入れ込んでいて、そういう世界の女達に母親や故郷を感じるのだそう。

「塚原君は母親的な縛りの世界が欲しくないかね」

「それはいつだって求めているよ」

二人は笑い合った。

「以前に新宿で見たショーはユニークだったね」竹山はコーヒーを飲みながら話し出す。「ナチスの親衛隊の踊り子が出て来て、可愛い子をいびるんだけど、それが凄いいロチックで、興奮したよ、ナチスの制服にはグツと来るね……」

「ああ、いいねえ。倒錯的なのは悪くない」

雄太は話を聞いただけで刺激的だった。

「今の時代はどっちかというマゾ的だね、権力に柔順になって奴隷のように生きることに喜びを感じる日本人は多いよ」竹山は続けた。「とにかく魂も精神も死滅に近い状態になっているから、強力なリーダーを待望していると思うな」

「ヒトラーが登場した頃、権力者賛美の抒情的な歌を唄って陶醉している映画があったね」雄太が言った。

「俺の記憶にもあるよ。俺も唄いたくなったよ」と竹山。

「今の時代もあり得るな」

「そうだよ。虚偽を信じてでも生きている人が沢山のよ」

二人は思いがけずヒトラーの時代の話をしたかと思うと、竹山がふと、

「塚原君も小説を書いているだろう」

と聞いた。雄太はすぐに答えられず間をおいて、「内緒だけど習作めいたものを書いていきます」

「塚原君を見ると、家に帰ってひそかに包丁を研いでいるように見えるからさ」

「好意的に言っていただいて光栄だね」

「いつか読ませてよ」

「書いたら進呈します」

「楽しみにしているよ」

「ところで、佐々木さんは何をやっている人ですか」

「詩を書いているみたいだね。近々詩集を出すという話を聞いているけどね」

「佐々木さんに詩人的な才能はあるの」

「いや、ないね。彼には表現は向いていません」

竹山は確信をこめて言ったが、雄太も「やっぱり……」と同感の意を示した。彼の心の奥の奥にあるものは何もない気がしていた。虚勢を張って自分を強く見せているだけで創造や想像に向いているとは思えない。雄太がそういう意見を述べると、

「僕もそうだと思うよ」竹山は共感した。「真の詩人はもっと深い不気味なものを感じさせるけど、彼は希薄だね」

「うん、単に表面的だよ。その点、峰杉さんの方が

荒地をコツコツと耕していて、確実に自分の領域を広げていますよ」雄太は褒め称えた。

「その通り。峰杉さんはやりますよ。そのうち佐々木さんを引き放すね」竹山は貶した。

「力の差ははっきりしている。僕は峰杉さんに世の中に出てほしいと願っています」

「いつか、マスコミの売れっ子になるよ」

峰杉隆一郎は時代小説を書いていて、人を容赦なく斬っていくのだが、美学があり、独自の思想を持っていた。無頼だが、折り目正しく振る舞い、したたかな不逞ぶりを秘めていた。

「彼の書く心の闇はゾクツと来ますね」雄太は率直な感想を口にした。

「人をあんなに憎むのは素晴らしいよ」

「今の世の中は憎しみの方が親しめるね」

二人とも同じような考えを抱いていた。その一方で、佐々木は才能がないから劣等感を抱いていて、しばしば顔を真っ赤にして、すぐに怒りだすから、気分が悪かった。

「SMセックスを楽しんでいる分には差し支えないけどね」雄太はニヤツと笑った。「僕もやっと奴さんの正体がわかって来たよ」

「でも」竹山は言った。「佐々木さんは復讐心が強いから、要注意だよ」

十月の下旬になり、気候も涼しくなっていて気持ちいい日々が続いている。夕方近く、漫画家と打ち合わせをして家に帰る途中、電車の中で顔見知りの女を見かけた。斜め向かいに座っている二人組の女の一人で彼女も時々こちらを見た。池袋の喫茶店のウェイトレスで、話したことがあった。パジャマのような薄い空色のパンツをはいていて、その恰好がどことなく不良っぽく見えるが、むしろ不良ではない。色白の地味目の顔立ちをしていて、何かを勉強しており、それなりの分野を極めているのかもしれない。連れの女がどこかの駅で下車すると、雄太は素早く立ち上って彼女の隣に移動した。

「厚かましくて、ごめんね」雄太は詫びた。

「ううん、平気」女は快く了解した。

「あなたは、池袋の店でバイトしているんだよね」

「そうなの」

思っていた通り学生だった。村下英子と言い、N大の芸術学部に着を置いていて、就職も内定し、卒業したらアニメーションの会社に勤めるのだそうだ。雄太が漫画雑誌の出版社に勤めていると言うと、仕事の的に

共通しているわねと笑った。雄太の出身大学を聞くと、不思議そうな顔をした。新設の看護学科を専攻したことだ。そこを選んだのは勉強が嫌いで希望の所に入れなかったからである。

「異色の経歴ね」

「どこでもいいから、大学に合格するのが先決だったからね」

「N大もそういう人が多いわ」

そんな話をしていたら、村下英子の降りる西荻窪駅に近づき、もつと話がしたいとデートに誘ったら素直にオーケーしてくれた。雄太はこれから何かが始まりそうな気がして浮き浮きした気分になった。

三日後、西荻窪駅で待ち合わせしたら英子が小金井公園を見たいと言うので賛成した。

電車に乗って座席に座ってから最近のニュースの話をした。

「京アニメの犯人、かなり回復して喋れるようになったね」雄太は話した。

仕事が好きで、女好きで交通事故を起こして働けなくなり、自殺した父親のことを考えると、雄太は他人事ながら暗澹とした気持ちになった。

公園には有名な古い建物が見られ、二人とも好奇心

を持って見物した。それからベンチに並んで腰を下ろした。いくらも経たないうちに英子の肩に手を回して乳房を触ろうとしたら、途端にはねつけられた。

「遊びで付き合っているの。それだったらお断りよ」

「いや、そうじゃないけど」

「じゃあ、何のつもり？」

「早く親しくなりたかったから」

「やっぱり、セックスを求めているのよ」

「君は違うの」

「当たり前よ。順番を踏むべきでしょう」

雄太はその時になって、ひどく間拔けなことをした
と思い、それで急いで取り消して謝った。後で考えると、タイミングがなっていないかのような気がする。

二人は気分を調整するため一時沈黙した。強い風が吹き出して目の前の木々がざわめいている。枝にかかっている木札にコナラと記されているのが目に止まった。

落ち着いた雄太は、「これからもっと好きになつていく
と思う。君は僕のタイプだから」心にあることを正直
に表明した。

「タイプだったら、もっと早く言ってよ。女はそういう
ことを言われると喜ぶのよ。気の利かない人ね」

「悪かったよ」

「でもタイプならいいわ」

雄太は別の木の札に別名ヤマナラシと書いてあるの
に気がついた。

「私は真面目に付き合ってくれる男性でないと、抱か
れたくないの」

「それ、どういう意味」雄太は念のために尋ねた。

「結婚するとかね」

「結婚を考えるなんて、まだ早いよ」

「自分は美人というほどではないから、できれば男性
から結婚の約束を取り付けたいの」

結婚できないなんて寂しいものと言う。何だか唐突
で変なことになった。英子だったら結婚相手くらい、
いくらでもいそうな気がする。

「誰もいなかったら、僕がもらってあげるよ」雄太は
こんなことまで口にした。

「えっ、本当なの」

「ああ、もちろんだ」

「それだったら、最高に幸せよ。あなたが大好きにな
るわ」

英子はそつと唇を寄せて来た。これで抱けるかと思
うと、弾んだ気持ちになった。本当は結婚なんか考え
たことはないのに何故そんなことを口走ったのだろう。

英子クラスに自信がないはずはない。理由を聞いたなら色白で背の高いのは気に入っているが、顔と手に引け目を感じている。雄太はそんなことは思ったことはないから、君が考えているほど悪くないよとお世辞でなく慰めてやったら、「それなら嬉しいわ」と満足そうだった。これからはただの友達ではなく、恋人同士になろうと誓い合った。

雄太は仕事にも一段と意欲が湧いてきた。英子とは何度もデートし、双方で急激に熱を上げ、彼女は雄太を買い被るようになった。新宿に映画を観に行った帰りにこんな話をした。

「雄ちゃんのことをお友達に話したの。ひらめき型の芸術家肌で、頭もよくて、並みの男とは違うとね」

「そんなんじゃないよ」

「小学校の頃から秀才で、神童という人もいたってね」

「そんなことはあり得ないよ」
必死になって否定したのだが英子は、私が見込んだのだから間違いないと後に引かなかった。郷里の母親にも電話で話したら、笑ってばかりで本気にしなかった。

「雄ちゃんのこと、どうしてこんなに好きになったか分かる？」

雄太は首を傾げた。

「教えて上げようか」

「うん、聞きたいね」

「もし、君に結婚相手が見つからなかったら、僕が引き受けて上げるって約束したからよ」

「そんなこと、言ったかな」

「言ったわよ。私、あなたの言葉を信じているわ」

それならそれでいいけど、英子の言葉を否定しなかった。彼女は恋人を完全に手に入れたと思っっているのか、自信に満ちている。

年が変わり三月になると、英子は大学を卒業し、新宿のアニメーションの会社に勤めるようになった。仕事は順調のようである。そして毎日のようにスマホをにかけてきたり、時にはプレゼントを送ってきたりした。

毎日淡々と過ごし、ウオーキングも欠かしたことがない。雄太の家は新大久保のエスニックタウンにあり、朝と夕方の二度、一定量歩くことにしている。その日の朝、一回りして帰ってくると、マンションの管理人が立っていて怒ったように、可燃ごみの山を指差した。小山の一角にロープでぐるぐる巻きにされた猫が捨てられていた。

「これだもんね」

「ひどいなあ」

雄太も顔をしかめた。こんな凄惨な姿を見たことがない、どこのどいつか知らないが、ひどく悪質である。管理人とは少しの間その話をした。帰宅するとスマホに英子が電話をかけて寄越し、遊びに来てよと言う。

「午後から行くよ」

雄太は返事をした。西荻窪の彼女のアパートにまだ行ったことがない。午後二時頃に出かけた。三階建てのアパートの二階で、八畳くらいの広さがあり、英子は歓待してくれた。生姜のクズ湯を作ってくれ、こんな美味しいものはないと喜んで食べた。

「そんなに言うなら毎日でも食べさせてあげるわよ」

「毎日はこちらに移って来たら」

「いつそのこと、こちらに移って来たら」

「そうはいかないよ」雄太は尻込みした。

「私を本気で愛しているなら、一緒に住めるはずよ」

「せかせしないでよ」

「私、雄ちゃんの顔を毎日見ていたいのよ。ねえ大事にしてあげるから、ここで住もうよ」

「そのうち判断するから待って」

雄太は押され気味になって返事に窮した。そんなやり取りを何度もしているうちに断り切れなくなつて、

結局は最小限の荷物をまとめて引越すことになった。

雄太は強く出られると言うままになる性格だった。界限には元資産家の家が廃墟になつていて、庭の枯木が風に吹かれると唸り声を立てていたりした。不気味な雰囲気なのか、英子は霊が出るという話もした。霊というなら宇宙人と行き会ったという人が会社にいると話したら、「わあ、凄い」英子は感嘆の声を上げた。それは言うまでもなく佐々木の体験である。小学校の頃のこと、顔の皺くちやの男が布製の地図を差し出して道を聞いたから佐々木は片手で差し示して教えてやった。同僚達はその話をとくに聞いており、胡散臭いと思いつながら誰も反論しなかつたそう。たまたま宇宙人の話が出た時、雄太は聞き逃ししないで、軽くジャブを飛ばした。

「まことしやかですな」

「誠だ」

「しかし彼らはまだ地球上に到達していませんよ」

「いや、来ている」

佐々木は断言した。しかし電波さえ届いていないのだからあり得ない。仮に地球上にやってくるとしたら、生物ではなくて、日用品とか映像とか無生物が先に送られてくるはずである。

「それらはすでに来ている。地球人を混乱させない為に公表しないだけだ」

「私は信じませんね」

「信じないのは、君の自由だ。創造的な仕事をしている者は、何かを信じていないと達成できないんだ。表現の原点はそういうところにある」

「でも後になって、思考が深まったら、自己分析すべきですよ。だけど佐々木さんは自己神秘化しているのです。恐らく自分を特別な人間だと過信しているからです、宇宙人体験をしたということで、箔をつけているのです」

「穿ったことを言うな」

「つまり才能のなさをそれでカムフラージュしているのだろう。むしろそれは黙っていた。」

「そのうち、正式に一流の雑誌に発表するから」

佐々木は自信に満ちて笑った。その時、女事務員が「お客さんです」と佐々木を呼びに来た。議論は中断して尻切れトンボになった。雄太はその話をしてから、嘘っぽいだろうと笑ったら英子はきっぱり否定した。

「宇宙人は地球上に来ているのよ」

「そんなこと信じる奴があるか」

「絶対にいるわ」

「バカ言え」

「編集長さんの言うことは本当よ」

いる、いないと言いつけ合いになったが折り合わず、そのあげく英子はネットに出ていた話を持ち出した。それは有名人やタレントが西荻窪のある所に集まって、皆でUFOを呼んだら静々と降臨した。彼らは感激して涙を流したと言うのだ。

「よくあるお伽噺だな」

雄太は一笑に付した。そんなものを信じるのは、どの程度の頭の持主なのか疑った。佐々木も大した男ではないのだ。それに佐々木はインドを崇拜していてヨーガの研究をしている。雄太はインドが好きになれず、ガンジス河を尊いと思ったことはない。崇拜者があの川の水を飲むというからゾツとした。要するにインドは大嫌いだ。世界中で一番嫌いと言っていい。

夏休みに、英子がふと思いついたように尋ねた。

「ところで、佐々木さんって、どんな人なの」

英子は前から気になっていたらしい。それで慰安旅行の時の写真を見せてやり、ただのオッサンだよと雄太は見くびったように言った。

「あら、イケメンね」

「色の浅黒い太り気味の中年だよ」

「ねえ紹介して」

「俺はイヤだね」

「いいじゃないの、ただ話すだけだから」

「いるはずもない宇宙人の話をするなんて、愚かしいよ」

「こういうのって信じている者同士でないと、通じないのよ」

英子は執拗に迫ってきた。一度言い出したらきかない性格だから、結局根負けして、「会うのは一度だけだよ」念を押して承諾した。

次の日、佐々木に伝えると、短時間ならいいよと返事した。その際、彼は興味ありげな笑みを浮かべた。

雄太は気色悪い奴だといやな気がした。

四日後の夕方、S書房近くの喫茶店で引き合わせた。

英子と佐々木は礼儀正しく挨拶を交わし、飲物を飲んでから英子が口を開いた。

「私は地球外生命体が、地球上に存在していることは心から信じています」

「そのことで塚原君に苛められました」

佐々木は苦笑した。

「私共は意見が異なります」

「それは仕方ないね」

英子は超常現象に興味を持っており、その点では佐々木に似ていて、気が合うようだった。二人は顔を見合せて話し出した。雄太には面白くないことから、そばにいたくなくて先に帰ることにして店を出た。一旦会社に寄って帰ることにした。帰宅してからレンジでカレーライスを温めて食べた。英子は二時間ほど帰って来ると、インスタント物を食べて腹ごしらえをした。食べながら感想を述べた。

「佐々木さんはそんなに偉ぶっていなかったわ」

「誰だって初対面の時は、低姿勢だろう」

「塚原君はいい仕事をするよと誉めていたわ」

「それくらいのこと言うさ」

話は合ったかと聞くと、英子は満足感に浸った顔つきをした。さらに、君を口説かなかったかと尋ねると、「あり得ないわ」英子は一蹴した。ヤツは手が早いけどなど雄太は言った。これで一大イベントは終わった。次の日もそれぞれの会社に出かけ、平安な日々は続いてもめ事もなかった。そして雄太はある空想をするようになった。それは佐々木に頼まれて彼の自宅に行かされることだった。もし佐々木に頼むと言われればいっただって引き受けるつもりでいる。ちよっと可愛くて

気の強そうな独特の雰囲気のある細君はたまらないほど性的な魅力があった。

以前にはこんなことがあった。

「私、年のせいかな、肩が凝るの」

細君の麻美は三十代の後半で、体つきはピチピチして、凝っているようには見えない。

「あんた、急ぐ？」

「いえ、急ぎません」

「それなら揉んでくれないかな」

彼女は夫の部下というよりも身内に頼むような口ぶりだった。いつの間にか二人の間には独自の親愛の情が通い合っていた。雄太は言われるままに肩に手をかけた。揉みほぐしていると、途中からうつ伏せにもなった。肉付きのいい体に触れるのはこの上もない愉悦だった。尻の方にも移動させたら間もなくして、麻美は「もういいわ」と制した。

「楽になったわ」

「お役に立ってよかったです」

「でも、佐々木には黙っていて」

「分かりました。安心してください」

雄太は駅に向かいながら不届きな妄想をした。今後何かあるかもしれないと胸が踊った。麻美は怪しい

振る舞いをして、無言で誘っているように思えてならない。あれでその気にならない男はいまい。

一ヶ月ほど経ったある日、竹山と一緒に帰った。話しながら歩いているうちに思いがけない噂を聞かされた。雄太にはただ事ではなかった。社員の一人が歌舞伎町で佐々木と英子らしい女が歩いているのを見たというのである。英子は雄太の用で会社に来たことから、顔を知っている社員もいる。

「あのクソ野郎！」雄太は激情に駆られそうになった。

「勘違いだと思っただけね」

「いや、考えられます。俺は許さんよ。妻は佐々木と

やったんだ」

雄太は憎悪で一杯になり、抑制が聞かないほどになって、知らないうちに信濃町駅に来ていた。竹山が別れ際にあまり興奮しちやだめよと、声をかけてくれた。

「大丈夫です」

電車の座席に座り、興奮を鎮めようとしたが、まだ血が上っていた。英子の浮気のことしか考えられなかった。頭の中で残酷な暴力を振るい、佐々木を血まみれにしている空想をしているのだった。焼け火箸で両目を突いたり、睾丸を叩きつぶしたりした。表情は醜

く歪んでいる。

七時頃、帰宅すると英子の姿はなかった。

チクショウ、あの野郎とラブホに行っているにちがいない……そんな独り言を言っていると、玄関で物音がした。

「誰だ」

「何言っているの、私よ」

「どこに行っていたんだ」

雄太は振り返って言った。「佐々木とやって気持ちよかったか」

「あんた、いきなり何を言い出すの。頭狂ったの」

「やったかどうか、聞いているんだ」

英子は馬鹿馬鹿しくて答えようがないというふりをした。

「俺は知っているぞ。あいつは異常なほどセックスが好きだから、お前は口説かれたいはずはない。どうだい、アヌスを舐められたり、挿入されたりした感じは」
英子は返す言葉もなく、いつとき間をおいてから、ようやく口を開いた。

「話にならないわ。もっと冷静になったら」

「お前が不倫しているのに冷静になれと言うのか」

「不倫なんて、していないって」

「見た人がいるんだ。それでも言い張るのか」

「見た人だって！そんなの嘘よ」

雄太は何かあるとすぐに動転するたちで、しかも佐々木はその方面の危機をはらんでいる。英子は手一つ握ったことがないと言うが、全く信じなかった。雄太は行くところまで行ったとしか考えられなかった。

「もういいわ。あんたの実体を知ったから」

「結構だ、俺はここを出て行く」

「どうぞ、どうぞ。私はあんたにとんでもない幻想を抱いていたわ。秀才でも何でもないわ。本当は、頭は物凄く悪いのよ」

「分かったらもう何も言うな」

雄太は新大久保の実家に電話をして帰る旨を伝えた。親は初めからヘンだと思っていたから、理由も聞かなかった。そして知り合いに軽トラックを回してもらおうように頼んでくれた。翌日には家に戻った。両親は歓迎したわけではなく、「ご苦労なこった」親父が情けなさそうにこぼした。

「女の言うままになるのがいけないわよ」おふくろが言った。

「お前は主体性がないぞ」

「俺、出直すよ」雄太は親に希望を持たせようとした。

一日休んで会社に出勤すると佐々木は何事もなさそうな様子をしていた。確証がないから咎め立てをするわけにもいかない。

半月程ほどして佐々木が詩集を自費出版したという話を聞いた。どんな詩を書くのか関心がない訳ではないが、買って読みたいとは思わなかった。装丁やイラストを描いたイラストレーターに感想を聞くと無言で首をかしげているだけだった。感想を口にする馬鹿にされるかもしれないと気にしているのだ。

「間違っているでもないよ」

雄太は寛容な言葉で話させようとしたが一言も発しなかった。下手なことを言つて恥をさらすのを恐れているのだ。

「佐々木さんには天分はないよ。エセ詩人同然だ」

そして頭で作つただけの空疎な言葉の羅列に過ぎないと決めつけた。佐々木を侮辱するというよりも本音だった。さらに付け加えた。

「彼は文学を志しながら文学の王道を歩めない男だよ」「読みもしないで、そんなこと言っているのかね」「イラストレーターは心配そうだった。

「かまわない、平気だ」雄太は自信があり強気だった。本人には言われないけれど耳に入ったのかもしれない。

それならそれでいいと雄太は開き直っている。

一ヶ月した頃、英子が家に電話をかけて寄越した。

「ごめんなさい」彼女は鼻をすすった。「私が悪かったわ。よく考えなかったの」

「やっぱり、そうだろう」

「心からお詫びするわ」

「俺は君の小汚い体には指一本触れたくない」

よりを戻すつもりはなかった。雄太は英子よりも佐々木が許せなくて、いつか意趣返しをしてやろうという一念しかなかった。それとは別に彼は空想のとりこになっていた。毎日のように麻美の妖しい魅力に取りつかれていて、何とか機会はないかと窺^{うかが}っていたら、その矢先に佐々木がインド旅行することになった。何日かして出かけた。チャンスとばかりに麻美にはこちらから連絡を取つた。

「お手伝いがあったら、仰つて下さい」

「お手伝いなんて、ないよ。それよりもあなたに言うたいことがある」

ビクつきながら何だろうと戸惑つた。

「電話じゃ何だから、店に来て」

何だか知らないが、声の具合からして怒っていることが分る。麻美の店に行くと、出入り口のドアに休業

の札が下がっていた。勧められるまま二階に上がると、すぐに飲物を出してくれた。歓迎の印だからこれで気分も楽になった。それでも何かありそうだなと気にしながら日本茶を飲んだ。二人とも飲み終わると、麻美がテーブルを折り畳んで壁に立てかけた。そしてこう言うのだった。

「あんた、亭主のことをエセ詩人と言ったそうだね。これほどの侮辱はないわ。どこがエセなの」麻美はきつい口調。

「理由はありません。カンで言っただけで」雄太は言った。

「カンで分るものか。論証しなさい」

「できません。私が悪かったです」

雄太は何度も頭を下げた。

「許さないよ」

「申し訳ありません。」

雄太は佐々木のことで本気になって謝っている訳ではなく、ひたすら麻美の歓心を買うためだった。案の定、それならお前を痛めつけてやると立ち上がって近づいてきた。

「何をするのですか」

「お仕置きだよ」

胸がドキドキした。麻美は背後に回ると草色のネットカチーフを外して、両手を後ろ手に縛った。

「私の言う通りにするのよ。いいね」

「分りました。覚悟はしております」

麻美は丸椅子に座った。どうするのかと思ったら片足を上げて、雄太の顔をザラリとこすった。スカートから空色のパンティが見えた。足で何度も撫でさすつたあげく、さらに加速した。

「しゃぶりな」

言いながら足の親指を口の中にすべり込ませた。「たつぷり復讐してやるからね」

受け身だが復讐しているのは雄太の方だった。

「音を立てるんだよ」

雄太は舌をピチャピチャと鳴らした。次に裸にされると体を足で蹴ったり、畳の上を転がしたりした。雄太も協力して自分から体を動かした。麻美の肉付きのいい体から熱が伝わって来て、どうにかなりそうだった。どこかの家から女の歌手がラジオで物悲しげな声で唄っているのが聞こえて来る。日常と非日常がない交ぜになったひとときが過ぎていく。どれくらい時間が経っただろう。最後に大団円が来て二人は頂点に達した。

「どうだ、参ったか」麻美が言った。

「身も心もとろけてしまいました」雄太は大きな声で言った。

「ウイスキーを飲みなさい」

「いただきます」

ゆつくりと喉に流し込むと、軽い酔い心地になった。

佐々木に仕返しをすることになったわけで納得した。

やがて解放されてお札を言つて帰ることにした。夕方近くで、高田馬場駅に向かいながら新たな境地に目覚めたような気分になった。

二、三日は呆然として過ごした。

会社では峰杉隆一郎がある雑誌の懸賞小説にノミネートされていることが囁かれていた。相当有力視されているようである。ライバルの佐々木は心中察してあまりあり、雄太は何度も彼の表情を盗み見た。動揺していることは確かだ。

それから間もなく、残業した帰りに佐々木に声をかけられた。信濃町駅近くの喫茶店で待っているようにと言われた。待つ間もなく佐々木はすぐにやってきた。

向かい合つて座っていると、佐々木は慌ただしくコーヒーを飲みほしてから尋ねた。

「君に率直に聞きたい。僕の妻にどうした」

どうやら耳に入っているらしい。雄太は少しの間考えてから答えた。

「奥さんの言う通りにしました」

「寝たのか」

「佐々木さんのご想像にお任せします」

「良心に恥じないのか」

それは佐々木にも言えることで、雄太一人が悪い訳ではない。が、佐々木は五角になるのが我慢ならないのか、お前なんか仕返しをされてたまるかと言わぬばかりだった。ふと佐々木さんは負けず嫌いで執念深いよと竹山が言ったことを思い出した。その時、スマホが鳴り、耳に当てると聞き慣れた声が出た。峰杉隆一郎だった。

「決まったらしいな」

「受賞ですか」

「そうだ」

「よかったですね。本当によかった。僕は祈っていました。嬉しいですよ。おめでとうございます。万歳です」

雄太は感激した口調で祝福した。佐々木を目の端でとらえると、思案顔をしていて、表情が青ざめているように見えた。電話が終わらないうちに佐々木は立ち

上がった。

「長引きそうだから、後日この話をしよう。俺、他に用事があるから」

そう告げた。もう分つただろう。かなりショックを受けたに違いない。佐々木はレシートを掴んでモソツとした仕種で店を出て行った。「気の毒に：」雄太はつい同情した。同情なんでもっとも屈辱だろう。佐々木と峰杉が親友同士といつてもライバルであり、お互いに後に一步も引けないのだ。そして佐々木が負けた。

峰杉の受賞は社内では大騒ぎになった。祝賀会などして雄太もかり出され、多忙な日々を過ごした。

騒ぎが収まった頃、佐々木から電話があつて明日家に来てくれないかと頼まれた。「麻美に言われてね」と付け加えた。夫婦は目下別居中と聞いているが、何だろうと訝いぶかつた。が、何にしても雄太はワクワクするよな気分になった。

「家内が変なことを言いだしてね、聞いてやってくれないか」

「ああ、いいですよ」

「いささかユニークな遊びだけど、あんたに是非協力してほしいと言うんだ」

それは放置プレイというやつで、SM雑誌で読んだ

こともあるから言葉だけは知っている。

「縛って一人にする遊びでしょう」

「そうそう」

「怖いですね」

雄太は初心者だから、長く留めておくわけにはいかない、三十分かそこらだろうと、麻美は話していたと言う。それくらいなら構わない、面白い、雄太は話に乗った。麻美はいくらサディスト役でも根は人並みの性格である。彼は指定された日の夕刻、佐々木の家にかけた。佐々木一人で麻美は不在だった。これも作戦だろう、雄太は言われるままにパンツ一枚になると、佐々木は大きな紙袋から二十メートル近くあるロープを手早く取り出した。

「これ、亀甲縛りというんだ」佐々木が言う。

「じゃあ、遠慮なくやって下さい」

「時間通りに麻美が来るから心配はない」

まず後ろ手にされて胸も胴も縛って、仰向けに寝かされ、動けないようにされた。視線の先の棚には置時計が置かれて時を刻んでいる。縛りが終わると、

「オーケー、これでよし」

佐々木は言い、顔に汗を掻いている。

「このまま待っている」

「麻美さんが来たら、何かしてくれるのですか」雄太はスケベっぽい顔つきをした。

「それは聞いていないな」

「でも楽しみです」

聞いていなくとも次の手で慰めてくれるに決まっている。その間に地震とか火事とか、そんな偶然はないだろう。佐々木は一仕事を終わると手を洗って、

「俺は帰るからな」

無愛想な表情を浮かべた。一人になると、体がモゾモゾしていささか気持ち悪くなつた。しかし、たかだか三十分くらいはすぐに経つだろう。できるだけ楽しんでもうと自分に言い聞かせた。だが意外と長い時間だったような気がした。そろそろ麻美は姿を見せるだろうと思つていたら、四十分、五十分と過ぎて行く。一体麻美はどうしたのだろう、忘れていいのか。時計で何度も確認しながら快感とはおよそ違うものを感じた。一時間が過ぎた。もしかしたら雄太をもっと楽しませてやろうとわざと引き伸ばしているのかもしれない。麻美がサーブス精神を発揮しているなら悪くない。でも変だな、時間がいくら過ぎてても姿を見せないのだ。それとも緊急の出来事でもできたのか。いや、そうではない、彼女のことだから約束は守るはずだ。そして、

「ただ今。スリル満点だったでしょう」と言いながらひよいと現われるかもしれない。さあ、オッパイを吸って楽になってよと慰めてくれるかも。しかし、そんなことはなく時間はのろきと過ぎて行く。しかも体中にウジャウジャと何匹もの毒虫でも這っているような痛みが襲ってくる。もしかしたら…と疑念が湧いてきた。もしかしたら…考えているうちにゾゾツとしてきた。もしかしたら、佐々木一人でやっているのではないか…。

こんなのが遊戯だろうか。やっぱり佐々木に騙されたのではないか、きつとそうだ、それしかない、それは確信に変わった。そうだとすると頭の中が錯乱しうになつた。

「あの糞野郎め！」彼は憎しみをたぎらせた。時間は十時、十一時を過ぎて、夜半の十二時を回つた。麻美は知らないとはいえ、とつくに帰宅してもよさそうだ。肌全体がザラザラして痛くって、また風邪でも引きそうだった。時計の針は午前二時を回り、いつの間にかうつらうつら眠ってしまった。激痛を覚えながら薄ぼんやと目が覚めた。どこかで車の軋る音がした。次に出入り口の硝子戸を開けている。麻美が帰ってきたのだろうか…。

「ワアッ！」と女の仰天した声がした。

「ど、どうしたのよ」麻美は動転している。

「佐々木に騙された」

「ひどいわ、ひどいわ」麻美は何度も口にした。理性を取り戻したのか、ロープを外しにかかった。雄太は自分の体を見た。体中にデコボコした後がついていて、鬱血している。我ながら鳥肌が立った。麻美は思わず顔をそむけ、横を向いたまま毛布をかけた。

「今すぐに救急車を呼ぶわ」

「ああ、頼むよ」

麻美はパーティーで遅くなったらしい。

「私は何も知らなかったわ」

「奴はどういうつもりだ！」

「佐々木は寂しいのよ」

「自分もそう思っていたよ。哀れな奴だ」

「沈み込んでいるのね」

「俺もこのザマだ」

雄太は自分のグロテスクな体を見ながら言った。やつと救急車のサイレンが聞こえて来た……。